

# 軍の命令には、逆らえない時代だった

日本は昭和20年8月15日に終戦を迎え今年で64年。戦争で負傷したり、家族を失うなど苦しい体験やつらい思い出を胸に秘めながら今日を迎えている方がいると思います。安平町にも第二次世界大戦に関わった方が暮らしています。今月は戦時下で青春を奪われた2名の町民の方に話しを聞きました。

## 命令は突然に

早来緑丘で農業を営む寺嶋弘三郎さんは大正13年3月生まれで現在85歳です。実家の農家を手伝っていた昭和16年7月に突然役場から海軍に徴用する令状が父に届きました。兄弟姉妹10人のうち届いたのは四男の寺嶋さんだけでした。町内で3名に命令が下り、17歳のとき横須賀の軍需工場で働くことになりました。

「軍国主義の時代は軍の命令に逆らうことはできず、上官の指示は絶対だと教えられていました」と当時を振り返ります。

## 休みなく働く日々

寺嶋さんが働く工場は精密機械のベアリングを製造。1週間交代の24時間体制で、朝7時から夜7時までと、夜7時から翌日の7時までの勤務寮では一部屋に4名が同居生活をし、1000人から1200人が兵器造りを担い、戦争の準備を進めていました。



横須賀にて撮影  
(左端が寺嶋さん)



「上司の厳しい監視下でミスをするや怒鳴られ、殴られることは日常茶飯事。戦争中の思い出はひたすら働いていたことと、空襲警報が鳴り防空壕に逃げ込んだことぐらい」と語る寺嶋さん。昭和20年に成人し7月にサイパン島に軍艦の修理に行く予定が敗戦色が強くなり危険な状態が続いたため中止。「もし出発したら生きて帰って来れなかったでしょう」とぼつりと話します。

そして迎えた8月15日。拡声器で広場に集まるようにと言われ全員が集合。ラジオから天皇陛下の声が流れ、戦争に負けたとはつきり聞こえた寺嶋さんは、アメリカ人が皆殺しに来ると先輩に脅され不安を感じていました。その後、寺嶋さんは帰郷し農業に従事。国によって奪われた青春時代を取り戻すかの

ように仕事に専念しました。今年、旧軍人・軍属に対して慰労の賞状が内閣総理大臣名で届きました。同じ境遇にいて賞状をもらうことなく亡くなった仲間にも申し訳ないという気持ちもあるといいます。

## 体力と健康が自慢

「名前は掲載しても顔写真には載せなくてください」と前置きし、樺太(サハリン)でソビエト軍と戦った宮崎長吉さん(早来栄町)は昭和19年2月に召集。近隣市町合わせて、184人が兵隊検査を受け30人が甲種合格し稚内を経由して樺太に向けて出発しました。

「6か月の訓練期間に殴られない日はなく厳冬期に服を脱ぎ裸足で走らされた思い出が鮮明に残っている」と話します。両親はすでに他界。農業をしていたので体力と健康には自信を持ち、当時は米一俵を担いだそうです。

## 負け戦で九死に一生

「ソ連兵の武器を知り敗戦を悟った」と宮崎さんは言います。日本の単発式の銃に対して1度に72発の弾が出る機

国から贈られた置き時計



関銃。さらにソ連の戦車の威力を見せ付けられ恐怖を感じた宮崎さんが所属する部隊は終戦後の8月24日まで戦っていました。手榴弾1個を持ち武器を捨てて敗走しました。

「戦争で女性や子供が犠牲になる光景を間近に見てきた」と惨劇を思い出し口数が徐々に少なくなっていました。

運よく北海道に流れ着き生還できた宮崎さんは自由で民主的であることを喜び、平和の尊さを再認識し、当時の誤った国策で犠牲となった多くの日本人たちの上に現在の私たちがいることを考えてほしいと力説していました。

「過酷な戦争体験をしてきたが、年数が足りないため軍人恩給は受けられず、内閣総理大臣名の入った置き時計が記念品として贈られただけです」と苦笑し、実物を見せてくれました。